

3 回目の冬がきます

3 回目の冬がきます

「ボーイズラブ」

[提供：NAN-NET](#)

3 回目の冬がきます

3 回目の冬がきます

3
回
目
の
冬
が
き
ま
す

3 回目の冬がきます

あれから3回目の冬が間もなくやってくる。

当時、28歳だった菊岡君（仮名）と俺はあの出張以来営みを重ねることとなった。打ち合わせが終わり、時計を見ると予め考えていた時間より3時間も越えており、どちらが言ったか覚えていないが、

「これから東京に帰ると午前様になる可能性があるから、明日ゆっくり帰るか」との問いに、お互い納得し金曜日の夜を現地で楽しむことにした。

週末で、ホテルのシングルも多数空いていると考えていたのが甘かったようで、

菊岡君は数件電話した後

「大山さん（俺）、生憎どこもシングルが満室です、どうしますか？」

との問いに、俺は冗談交じりに「ツインでも、ダブルでも野宿以外なら良いよ！」その答えに、彼はツインを予約したのである。

歩いて直ぐのホテルで、チェックインを済ませて、打ち合わせでの客先の愚痴を溢しながらこの時過ぎたので

3 回目の冬がきます

ホテルに帰ることにした。

ツインの為に、お互いにシャワーを浴び俺がシャワーから出るとそこには、缶ビールが用意されており、二回目の宴を始めることになった。

ある程度時間が過ぎた時、隣の部屋から男女の戯れによる女性の喘ぎ声が、薄い壁を越えて聞こえてきたのである。

ホテルのつくりからして、隣もツイン若しくはダブルなのかと考えられるが、かなり激しい喘ぎ声に、俺が一言

「隣に負けず頑張るか！」

菊岡君は、

「僕が女性(役)でよいですか？」

との素早い答えに、お互い笑ったのである。

しかし、ある意味彼が冗談を交えた一部本音が入っていたことは、今まで彼と呑んだ経験から俺には理解できた。

以前、呑んでいても何度か、肩を組んできたり、

「高校の体育祭で女装をして、優勝したことがあるんですよ！」

等といいながら、うなじを色っぽく見せることが幾度もあった。

その、記憶が脳裏を貫き菊岡君は、ちよつと本気が混じっているようなと感じたので

ある。

実際、彼は入社当時高校生と言つても良いくらいの童顔で、未だに私服で居酒屋に入ると年齢を聞かれる事があると云つ。

お互い大笑いした後、

「勿論、俺が女性だと想像がつかないだろう！」と

半分本気で言つた。

半分本気で言つたことを、彼が察したかはわからないが、浴衣のまま俺の横に擦り寄つてきたのである。

酒が入っている俺も調子に乗り、彼の肩に手をかけたら彼の手が俺の腰を抱きかかえる様に身体を一層寄せてきた。

「もう我慢出来ない！」と俺が彼をベットに冗談で倒しこむと、彼が俺に抱きついてきた事には、驚きを隠せなかつた。

それから、さ分・・・いや、一分かも知れない。

妙に長い時間が過ぎて、俺の心臓は爆発しそうな鼓動に襲われながらも彼の唇に唇を合わせたら、彼の暖かい舌が俺の口に入り込み、お互いの粘膜を刺激したのである。

3 回目の冬がきます

その後、彼の股間に手を伸ばすと堅くなっており、浴衣を脱がし首筋から下腹部へ舌を這わせたら、彼が隣部屋の女性以上に可愛い声で喘ぎ始めた。（勿論、隣に聞こえるほどの声ではない。）

優しく舌を這わせ、股間にたどり着いたらまた、胸に戻りじらしながら、彼の物を愛撫したのである。

彼の綺麗な身体は、今までアナルをなめたことの無い俺の気持ちを変えさせ、思わずアナルに舌を這わしたのである。また、彼も俺の物を啜えお互いの性感帯を愛撫しあった。

あれから何時間経過したのか、お互いのアナルに性器を挿入することは無かったが、とても長い時間の舌技プレーに酔いしれた。

彼は、当時既に結婚していたが、奥さんに舐めてもらった事は無く俺の舌技に快感を覚えたと今だに言っている。

家庭を持っている彼とはその後、年に二回ほど愛し合っているが、最近では離婚して俺と一緒にいたい等と理性を失いかけている面がちょっと怖い。

3 回目の冬がきます

3 回目の冬がきます

二〇〇八年三月三十一日 投稿

掲載元 官能小説セレクション

(URL: <http://www.kannou.cc/>)

提供 NAN・NET

(URL: <http://www.nantv.com/index1.htm>)

投稿された文章の著作権は、全てNAN・NETに帰属します。当サイト内の文章、音声等の情報の無断転載、無断引用は禁止です。情報の転載、引用、掲載、取材等をご希望の場合は、必ずご一報ください。上記の要望に対し当社が問題が無いと判断した場合、他メディアにおいて、投稿された情報が掲載等される場合があります。

3 回目の冬がきます